ワニ氏の伝承　その一

―氏名の由来をめぐって―

黒沢幸三*

（一）

大化前代に中央の雄族として活躍したワニ氏の氏名は記紀に出てくるワニに由来するだろうとの見解はかなり以前からあった。しかしその充分な論証はまだ行なわれていない。その上記紀『風土記』にあらわれてくるワニの実体がいかなるものであるかもはっきりしていないのである。それ故まず古代文献におけるワニに関する資料を列挙し、資料に基づきながら諸説を検討してみよう。

(1)僕淤岐の島に在りて、此の地に度らむとすれども、度らむ因無かりき。故、海の和邇を欺きて言ひしく、『吾と汝と競べて、族の多き少きを計へてむ。故、汝は其の族の在りの隨に、悉に率て来て、此の島より気多の前まで、皆列み伏し度れ。爾に吾其の上を蹈みて、走りつつ讀み度らむ。是に吾が族と孰れか多きを知らむ。』といひき。如此言ひしかば、欺かえて列み伏せりし時、吾其の上を蹈みて、讀み度り来て、今地に下りむとせし時、吾云ひしく、『汝は我に欺かえつ。』と云ひ竟はる即ち、最端に伏せりし和邇、我を捕へて悉に我が衣服を剝ぎき。（『古事記』神代の巻）

(2)即ち悉に和邇魚どもを召び集めて、問ひて曰ひしく、「今、天津日高の御子、虚空津日高、上つ国に出幸でまさむと為たまふ。誰は幾日に送り奉りて、覆奏すぞ。といひき。故、各已が身の尋長の隨に、日を限りて白す中に、一尋和邇白ししく、「僕は一日に送りて、即ち還り来む。」とまをしき。故爾に其の一尋和邇に、「然らば汝送り奉れ。若し海中を渡る時、な惶畏ませまつりそ。」と告りて、即ち其の和邇の頸に載せて、送り出しき。故、期りしが如、一日の内に送り奉りき。其の和邇返らむとせし時、佩かせる紐小刀を解きて、其の頸に著けて返したまひき。故、其の一尋和邇は、今に佐比持神と謂ふ。（『古事記』神代の巻）

(3)是に其の言を奇しと思ほして、其の産まむとするを窺伺みたまへば、八尋和邇に化りて、匍匐ひ委蛇ひき。（『古事記』神代の巻）

(4)又曰はく事代主神、八尋熊鰐に化為りて、三嶋の溝樴姫、或は云はく、玉櫛姫といふに通ひたまふ。（『日本書紀』神代紀）

(5)是に火火出見尊を大鰐に乗せて、本郷に送致りまつる。（『日本書紀』神代紀）

(6)時に豊玉姫、八尋の大熊鰐に化為りて、匍匐ひ逶蛇ふ。（『日本書紀』神代紀）

(7)已にして鰐魚を召し集へて問ひて曰はく「天神の孫、今還去さむとす。儞等、幾日が内に、致し奉りてむ」といふ。時に諸の鰐

* 国文学研究室　（1972年9月30日受理）

魚、各其の長短の隨に、其の日数を定む。中に一尋鰐有りて、自ら言さく、「一日の内に、則ち致しまつるべし」とまうす。故卽ち一尋鰐魚を遣して、送り奉る。（『日本書紀』神代紀）

(8)天孫、心に其の言を怪びて竊に覘ふ。則ち八尋大鰐に化為りぬ。（『日本書紀』神代紀）

(9)「海神の乘る駿馬は、八尋鰐なり。是其の鰭背を竪てて、橋の小戸に在り。吾當に彼者と共に策らむ」とまうして、尊を將て、共に往きて見る。是の時に、鰐魚策りて曰さく「吾は八日の以後に、方々天孫を海宮に致しまつりてむ。唯し我が王の駿馬は、一尋鰐魚なり。是當に一日の内に、必ず致し奉りてむ。……故、天孫、鰐の所言の隨に留り居して、相待つこと已に八日なり。久しくして方に一尋鰐有りて来る。因りて乘りて海に入る。毎に前の鰐の教に遵ふ。（『日本書紀』神代紀）

(10)又、此の川上に石神あり。名を世田姫といふ。海の神鰐魚を謂ふ年常に、流れに逆ひて潜り上り、此の神の所に到るに、海の底の小魚多に相從ふ。或は、人、其の魚を畏めば殃なく、或は、人、捕り食へば死ぬることあり。凡て、此の魚等、二三日住まり、還りて海に入る。（『肥前国風土記』佐嘉の郡）

(11)これは長いので簡単に説明する。天武天皇の時代に語臣猪麻呂の娘が、「伴の埼（昆売埼）に逍遥びて、邂逅に和爾に遇ひ、食われてしまった。悲しみ怒った父は海岸にて矢や鋒を持って、天地の神々に祈ると百匹もの「和爾」が一匹の「和爾」をかこんで岸辺に寄ってきたので、猪麻呂はその「和爾」をさし殺した。（『出雲国風土記』意宇郡）

(12)これも説明すると、中海の産物名を列記した中に、人鹿、白魚、海松などとともに「和爾」があげられている。（『出雲国風土記』嶋根郡

(13)古考の伝へていらく、和爾、阿伊の村に坐す神、玉日女命を恋ひて上り到りき。その時、玉日女命、石を以ちて川を塞へましければ、之會はずして恋へりき。故、恋山といふ。（『出雲国風土記』仁多郡）

これらの例に依拠して追求されたワニの実体は大別すると三つの説に整理することができる。第一は松岡静雄氏の『新編日本古語辞典』に代表される説で、ワニを舟としている。すなわち

ミクロネシア語のワ（舟）、フィジー語のワニカ（舟）等と同源か―此語は夙に廃用になったが、上代はフネ（舟）と同義語として用ひられたもののやうである云々

とある。なるほど(6)(7)(9)などによるとワニは一見、舟とも考えられるが、他の資料の語る所は動物である。われわれはワニを動物と考えるべきであろう。

第二はワニを魚類の鮫（又は鱶）とする説で、第三はワニを爬虫類の鰐とする見解である。第三説の弱点はわが国に鰐が棲息しない所にあり、それ故第二の説が圧倒的に多いわけである。早く狩谷掖斎は『箋注倭名類聚抄』において

按鰐魚皇国不産、和邇鮫之一種、大頭巨口、大者呑人、漢名未詳

と説明したが、山陰地方の方言では鱶や鮫を「わに」と云っているので、掖斎の見解が通説として認められようとしている。例えば日本古典文学大系の『古事記』にて倉野憲司氏はワニについて

海蛇、鰐鮫などの諸説があるが、海のワニとあることと、出雲や隠岐島の方言に鱶や鮫をワニと云っていることを考え合せて、鮫と解するのが穏やかであろう

とし、日本古典全書の神田秀夫、太田善麿両氏校註の『古事記』上巻もこれとほぼ同じことを述べている(1)。

ところがワニを鮫とすると(3)の「御蔭ひ委蛇ひき、」(6)の「御蔭ひ逶蛇ふ」を説明することができない。これはうねりくねって行く姿態を表し、魚類よりは鰐の姿に合致している。また(11)の娘が昆売埼に「逍遥びて」というのも水中に遊んでいたのではなく海岸（陸上）を遊歩していたととるのが正しいであろう。すると鮫は陸にのぼることはなく、ここでもワニは爬虫類の鰐と考える方がよい。しかるに(12)においてはワニは海産物としてあげられている。つまり『出雲国風土記』ではワニの実体は錯乱しており、この書に語られているワニは更めて検討されなければならない。さらにもう一つ云うならば(1)の「我を捕へて悉に我が衣服を剥ぎき」も鮫よりは鰐ととる方が適切である。

ワニを鰐とみる見解の欠患はひとえに鰐が日本に棲息しないという点にかかっている。この問題さえ解決すれば鰐の方が鮫よりも資料の示す所に合致しているのである。故にわれわれは広い見地に立ってこの問題の解決に向かわねばならぬ。神話学者の松村武雄氏(2)は(1)の因幡の白兎の話が南洋から渡来してきたもので、南洋の話において鰐とあるように、ここのワニも鰐と考えるべきであり、(2)の豊玉姫出産の神話も

少くともワニに関する観想、信仰の関する限り、古き代の我が国に自生的なものではなくて、熱帯地方に発生したものとすべく、而して熱帯地方のうちでも特に南洋とすべきであらう。なぜならこの神話に先位する海幸彦・山幸彦の神話は、明かに南洋からの渡来であるからである。

と強く鰐説を主張している。

同じく神話学者松本信広氏(3)は日本の神話とインドネシアの民話や習俗とを比較検討するとともに、インドネシア半島、ジャワ、ボルネオ、セレベスなどを含むオーストロアジア族、オーストロネシヤ族における鰐の名称を広く考察した。その結果ワニを意味する語は、

(A) bまたはpの唇音に母音をつけた短綴語
(B) wまたはvを語頭にし、それに母音をつけた語

とみて、

(A)（b＋母音）
(B)（worv＋母音）

の二つの語根形式がごく初期より併存していたが(B)の方が本源的であったとしている。またマライ山地では鰐の鳴き声を、wak-wak-wakと伝えているが終子音のkをはっきり発音しないから、「ワ」という鳴き声が擬声語として鰐の名称になったのであろうと云っている。この見解のもとに松本氏は鰐を示す南海語の古代形の一つとしてwanjaという形式を考え、この語形が日本に入り、wanja—wanjia—waniというように変化したであろうと説いている。そして

即ち「わに」と云う名称は本来南海に於て使用されてゐた南海語の「鰐魚」を指す語より出で、之をもって鰐魚を表はしていたのであるが、鰐魚の棲息しない我国に於いて使用せられてをるにつれ、次第に現実的性質を失って、神怪的性質を帯び来り、かつ、その一部性質の相似点から鱶、鮫の類の名称と転化したのではあるまいか。

と結論づけている。私は松本氏の考察によってわが古文献に散見するワニが鰐であることはほぼ論証されたとするものである。『出雲国風土記』や記紀に見られる矛盾は鰐が日本に棲息しないためにおこったこととして説明されよう。ところが言語の渡来はその言語を話す人間集団の渡来である場合がままある。日本人の先祖の中にははるか南方海上よりの渡来者もあったのではなかろうか。

（二）

すでに資料(2)でみたごとくワニは「佐比持神」とも云った。ところ

がサヒと同義語と思われるものにスキがある。それ故ここではワニ、サヒ、スキの三語をめぐる問題を考察しよう。「推古紀」二十年の条にある

真蘇我よ蘇我の子らは
馬ならば日向の駒
太刀ならば呉の真鋤
云々

の歌が示すように、古代の日本語には刀剣を意味するサヒということばがある。このサヒは「佐比持神」の「佐比」と同じであろう。また「神武即位前紀」には

時に稲飯命、乃ち歎きて曰はく、「嗟乎、吾が祖は天神、母は海神なり。如何ぞ我を陸に厄め、復我を海に厄むや」とのたまふ。言ひ訖りて、乃ち剣を抜きて海に入りて、鋤持神と化為る。

とある。この「鋤」は例えば『日本霊異記』上巻三話の訓釈に「鋤敷支」とあるように一般にスキとよまれているが、稲飯命の母玉依姫はワニと化する姉の豊玉姫と同じく海神の娘であるから、(2)の「佐比持神と関連させて、「鋤」はサヒとよむべきであろう。

「雄略紀」には雄略天皇が和邇の佐都紀臣の女、袁抒比売を妻問う時の歌に

嬢子のい隠る岡を
金鉏も五百箇もがも鉏き撥ぬるもの

というのがあり、「故、其の岡を號けて金鉏岡と謂ふ」と説明している。この歌や説明の「金鉏」は歌詞の「加那須岐」にあたる語であるから、「鉏」はスキとよまれる。しかし「斉明紀」五年三月条の人名「膽振鉏」について「此云二伊浮梨娑陛一」と細註があり、サヘはサヒの転訛で、「鉏」はサヒともよまれたことがわかる。

つまり「鋤」、「鉏」はともにスキ、サヒとよまれ、またともに刀剣と農耕のスキを意味したが、このことを三品彰英氏は(4)、スキは日本訓で、韓訓は sap でサヒであり、「古くは刀剣や鋤などの鍛冶物を広く云った語」と説明している。ところがここに注目すべき用例がある。それは「神功皇后摂政前紀」の記事で

冬十月、従二和珥津一発之

とあり、「和珥津」は対島の上県郡鰐浦の地である。同じく「神功皇后紀」摂政五年三月の条に

因りて、葛城襲津彦を副へて遣す。共に対島に到りて、鉏海の水門に宿る

とあるが、「鉏海の水門」は「和珥津」と同地をさし、ここに資料(2)と同じく、ワニ＝サヒの関係がみられる。しからば何故に鰐が佐比持神であるのか、その理由の説明なくしてはワニ＝サヒということは承認できないであろう。

『和名抄』によれば

鰐　麻果切韻云鰐音鄂和名和仁似レ鱉有二四足一喙長三尺甚利歯虎及大鹿渡レ水鰐擊レ之皆中断

とあるが、ここに「甚利歯」と歯の鋭さが強調されている。また資料(2)の「佩かせる紐小刀」とは懐中に帯びていた小刀で、それを「其の頸に著けて」とは小刀を鰐の首に植えつけるという意味で、おそらくこれは鰐の鋭い歯をサヒ（小刀）に見立てることに基づいて、「佐比持神」の由来を語ったのであろう。サヒには太刀の意味もあるが例えば『聖語蔵本十住毘婆沙論古点』には(5)

斧鉞刀楯、鉾戟弓箭、鉄刻小刀椎棒……千ノ釘ヲモチテ身ヲ傑キ刻刀ヲモチテ刮ギ削ル

とあり小刀の意味もある。つまり(2)においてはサヒは鰐の利歯であるとともに小刀であり、この二者の類似の関係からワニ＝サヒということが生じたのであろう。

サヒ、スキ、ワニの関係は以上のごとくだが、またこれらの語は古代の人名や地名に多く含まれている。その一半はすでに述べたがここに若干の例を示すと、伊佐比宿禰（仲哀記）、小子部連鉏鉤（天武紀）、紀朝臣佐比物（続日本紀）、越中国新川郡佐味（左比）（和名抄）、阿遲鉏高日子根神（神代記）、大日本彦耜友天皇（懿徳紀）、岡県主熊鰐（神功皇后紀）などをあげることができるが、これらはサヒやスキの霊力を尊ぶ立場からの命名であろう。同じくサヒやスキは霊力に富むものとして諸国の神社に祭られているし、『播磨風土記』揖保郡の佐比岡の話はサヒを祭る由来を示している。

ところがサヒ、スキと並んで鰐の崇拝もかなりみられる。資料(10)によればワニは海神であって大小の魚がそれに従っているし、(4)によれば事代主神はワニになって女に通い、さきにあげたように稲飯命は海に入って鋤持神となっている。故にワニについてもスキと同じような性格を指摘できると思うが、水棲動物としてのワニの神聖視とその利歯に対する崇拝と二つを考えることができよう。

以上まわりくどい論証になったが、サヒ、スキ、ワニは古代の日本語においては同義語で、しかもそれぞれの持っている霊力に対する崇拝があったことを指摘しておきたい。

（三）

ワニ氏の氏名の由来を考えるには、今まであまり注意されなかったが次のような資料がある。

即ち丸邇臣の祖、日子国夫玖命を副へて遣はしし時、即ち丸邇坂に忌瓮を居ゑて羅り往きき。（「崇神記」）

復大彦と和珥臣の遠祖彦国葺とを遣して山背に向きて、埴安彦を撃たしむ。爰に忌瓮を以て、和珥の武鑪坂の上に鎮坐う。則ち精兵を率て、進みて那羅山に登りて軍す。（「崇神紀」十年九月の条）

この二つを検討してみると内容は同じで所謂埴安彦の反逆にまつわる記述で、両者とも旧辞に基づいていると考えられる。しかもさらに一歩深めて云えばその旧辞はワニ氏の家文を資料としているのであり、これらはワニ氏の伝承と見做される(8)。

このワニ氏の伝承記事でまず問題になるのは「丸邇坂」に照応している「武鑪坂」である。「武」とは人名などの固有名詞に美称として多く使われる語で、「鑪」は諸橋轍次氏の『大漢和辞典』によればスキで、「武」をとってみると「丸邇坂」「鑪坂」の対応がみられる。そもそもワニ坂は「神武紀」己未年二月の条、引用の「崇神紀」十年九月の記事の前、「応神記」の歌謡などに繰り返し出てくる坂で、ワニ氏の本拠地和爾（現天理市櫟本町和爾）の中での聖地と考えられる。そしてその由来は「武鑪坂」の意味の中にも見出されるのであるが、それをはっきりさせるため「忌瓮を居ゑ……」から説明しよう。

この「忌瓮云々」の記述は次のごとく

大吉備津日子命と若建吉備津日子命とは、二柱相副ひて針間の氷河の前に忌瓮を居ゑて、針間を道の口と為て吉備国を言向け和したまひき

と「孝霊記」にもあり、さらに『万葉集』にも

草枕旅行く君を幸くあれと斎瓮すゑつ吾が床の辺に（三九二七番）

とある。「忌瓮」とは忌み清められた神聖なかめのことで、そのかめに神酒を盛って神祭などを行うもので、「居ゑる」とは土地を掘ってかめの下部を安定させることで、その目的は『古事記伝』に

凡て国言向に出立道口にて、必ずする行事にて、ゆくさき平安て言向意むことを鎮ひ祈るなるべし。

とあるように味方の戦勝を祈る古い時代の呪術であったと考えられる。

さて、すでにふれてきたごとくスキとはサヒで、サヒはまた鰐の利

歯を意味した。すると「武錄坂」は「猛々しい鰐の歯の坂」の意となり、その坂で一族の命運をかけた呪術を行なうとは、ワニ氏にとって鰐や鰐の歯が特別の意味を持っていたことを示す。また応神天皇とワニ氏所出の矢阿技比売の成婚をことほぐ次の歌謡（一部のみ引用）の中で、「丸邇坂の土」が強調されている事情も同じであろう。

階だゆふ楽浪道を
すくすくと我がいませばや
木幡の道に逢はしし嬢子
後手は小楯ろかも
歯並は椎菱なす
櫟井の丸邇坂の土を
端土は膚赤らけみ
底土はに黒きゆゑ
三栗のその中つ土を
頭衝く真火には當てず
眉畫き濃に畫き垂れ逢はしし女

ここに「櫟井」とはワニ氏同祖系譜（「孝昭記」）にある壹比韋臣と関連ある地名で、広い意味のワニに含まれる地で、矢河枝比売はその櫟井のある丸邇坂(7)の土で眉を畫き垂らして、応神天皇と出会ったのである。比売がこの坂の土で化粧するのはこの地に忌瓮をすえるのと同じ意義を持つと考えられる。それとともにこの坂の土がこの歌謡の製作に際して重要な契機となっていることを思うべきである。

しからばワニ坂とはどこにあるのか。それはワニ氏の拠地内でしかも祭祀にゆかりのある所に求むべきである。『延喜式神名帳』は大和国添上郡に和尓下神社二座、和尓坐赤坂比古神社を載せているが、特に後者は現和爾集落の中心にあり、かつては大社で月次、新嘗の官幣に預かっていた。「赤坂比古」の「比古」はヒメと対をなし、多く（地名＋ヒコ）の形をとって男神につけられる語である。するとワニの地に「赤坂」なる所があったことになるが、この赤は云うまでもなく呪色をあらわし、聖地たることを示している。しかもすでに「応神記」の歌謡にみたように、ワニ坂の「端土（上層の土）は膚赤らけみ」とある。和尓坐赤坂比古神社をもってワニ坂の遺称地と考えてみたい。

『大和志料』上巻はこの神社について

櫟本町大字和邇（北垣内）ニアリ。天平二年十二月大和国正税帳残闕（正倉院文書）ニ「丸（ワニ）神戸穀云々」（中略）新抄格勅符抄ニ「和爾神四戸（大和）」（中略）トアリテ、古ハ盛大ナル社頭ナリシモ中世以降衰微シ今ハ村社タリ。祭神赤坂比古命何神ナルヲ知ラズ。蓋シ和珥氏ノ祖神ナラン

と記しているが、私はこの祭神を鰐とみる者である。それは三輪神社の蛇と同じく爬虫類である。またこの「和爾神」（『新抄格勅符抄』）信仰を察知する資料には、折口信夫氏が示唆しているように春秋二度の祭りをもっていた小野神がある。(8)。以上の諸資料から推察すれば、赤坂比古神社はワニ氏の氏神で、族長権の交替期や春秋の祭りにあたってワニ氏の系譜や伝承がこの神社の社頭にて語られたものであろう。

かくしてだんだんはっきりしてきたが、ワニ氏の氏名は鰐に由来していると想定される。柳瀬寛爾氏(9)によればインド、エジプト、アフリカなどでは鰐が崇拝され、インドネシアやニューギニアではワニを祖霊の住所と見、さらにワニの子孫と称する氏族もあると云う。これはワニ氏の問題を考えるにあたって示唆的で、鰐はワニ氏の祖霊とみることができよう。しかもすでにふれたごとくこの日本の古代にも鰐崇拝の痕跡が見られた。するとワニをもって氏名としたワニ氏の先祖は何時の時代にか、八重の潮路をかきわけてこの列島に渡来してきたことになるのではなかろうか。最初にとりあげたワニにまつわる記述

の関連地域は大まかに云って、出雲、日向、肥前となり、さらに「鋤持神」の記事（神武即位前紀）は熊野、「和珥津」を含む記事（神功皇后紀）は対島である。安易な推定は慎しむべきだがこれらは南方よりの黒潮やその分流のうるおす地域である。南方海上よりのワニ氏の渡来ということはもはや私一人の幻想とは云えないであろう。

記紀をはじめ『風土記』や『万葉集』には「妣の国」や「常世の国」に対するそこはかとないあこがれが垣間見られる。この憧憬は先祖の海上よりの渡来という遠い追憶に由来するのではなかろうか。さらにまたこれらの古文献に散見する故国に対する郷愁や異郷意識は記紀の伝承を生む目に見えぬ母胎であったかもしれぬ。先祖が持っていた広い経験や彼らの見果てぬ夢を今一度思うべきである。ここに追求したワニなる語はまことにもって片々たる一語にすぎないが、その意味するところはかくのごとく重大なのである。

（四）

日本民族の渡来を扱かったものに柳田国男氏の大著『海上の道』がある。ここでは日本人は最初どこからどこへ渡ってきたか、彼らには何のめあてがあったのか、そして次々とどの方面へ移り広がって行ったかが、豊富な材料と雄大な洞察のもとにくりひろげられている。しかし氏の用いた資料は口承の伝承が中心である。無論そこに蓄積された学問や、奔放な想像力は素晴らしいが、民族の渡来を示唆している一等資料の記紀を軽視していることは否めない。そのためかどこからどこへの問題が必ずしも具体的に説かれておらぬのが残念である。

また益田勝実氏の『日本列島の思想』は海上よりこの列島に渡り住んだ日本人の想像力を追求している。そして「あとがき」には次のようなことが述べられている。

この弧状の火山列島の各地の渓流には、イワナやヤマメのような、大洋から溯ってきて、もどっていく術を忘れ、形質も矮小化してしまった魚たちがいる。中流のハヤなどもそうである。大井川や早川の最上流地帯を歩きながら、多摩川の岸辺に坐りこんで、わたしがいつか感じとるようになったのは、かれらとわたしとの運命の類似性であった。とりわけ、数年前、そこらは一本の川も流れ出ていない本栖湖で、小アユをつかんで、思わず引き込まれた陸封の生涯の感慨は、深く心に刻み込まれている。ここのアユは、小さいながら腹に美しい朱色が浮かび上り、成熟して産卵期に近づいていることを示していた。一生海へ下ることはないが、それはそれで完熟し、発展もあろう。

陸封の生涯！とわたしがいうのは、国外へ旅する、しないの問題ではない。実に長い間この列島上に暮してきた日本人の子孫として、いやおうなしにわたしの精神が何をその歴史から受けとっているか、それに規制されているかのことであり、そして、自分の体内に眠りこけているさまざまな可能性に、どんなに気づこうとしていないかのことである。

ここに長々と益田氏の文章を引用したのは私がこの部分に感銘を受けたからである。しかし「大洋から溯ってきて」、「海へ下る」ことをしなくなったのはわれわれの身近にも例があるのではなかろうか。古代ワニ氏の後裔を現在の日本に見いだすのはむずかしい問題だが、現に赤坂比古神社を中心に百五十戸ほどの集落がある。式内大社が村社と変り果てたようにこの集落にも幾多の変遷は考えられるが、古代ワニ氏の血や習俗を伝えているのはやはり和爾の人々であろう。その和爾の温和な住民と私は何度もことばを交したが、彼らの生活の中には潮の香りはない。まして遠い先祖のことを語る人もいない。農業を中心に静かに生活している彼らの中に私は「陸封の生涯」をみる。その面貌、その骨格、それは渡来者の後裔の姿であるとともに日本人の姿である。

注

(1) 文永・弘安の頃の成立と云われている『鹿袋』にある因幡の白兎の話は『古事記』(資料(1))に基づいている。その文中に「ワニト云フ魚アリケリ」とあるが、これは資料(12)などと同じく鰐が日本に棲息しないことから生じた誤りで、このような情勢のもとに当地方ではワニを鱶や鮫と見做して行ったのではなかろうか。因みに東条操編『全国方言辞典』には「わに。鱶。鮫。隠岐島」とある。

(2) 松村武雄著『日本神話の研究』第四巻

(3) 松本信広『国語と国文学』昭和二十四年十月号所収の「和邇の名義」

(4) 三品彰英著『日本書紀朝鮮関係記事考證』上巻

(5) 『訓点語と訓点資料』第四輯所収の春日政治「古訓雑記」参照

(6) この二つの記事についての詳しい考察は続稿にて行なう予定である。

(7) 「応神記」にある歌謡の「和邇佐」が「丸邇坂」であることを充分に論証したのは、土橋寛著『古代歌謡全注釈』古事記編である。

(8) 『折口信夫全集』第九巻所収の「柿本人麻呂」

(9) 『世界大百科事典』わにの項の「ワニをめぐる習俗」参照

The Tradition of Wani-clan

I. On the origin of clan-name

Kozo KUROSAWA

Summary

The word "Wani" often appears in ancient Japanese literature. It is thought to mean "Crocodile". Howerer, there are no crocodiles in Japan. In Indonesia "Crocodile" is pronounced "Wanjia" in some areas. In many cases the first syllable is pronounced "Wa." In ancient times there was a clan in Japan called "Wani". The crocodile was the deity of this clan. Ther are similar cases in Indonesia. It is possible that ancestors of the Wani clan crossed over from Indonesia to Japan. As there are South Sea and Indonesian elements in ancient Japanese literature and in the mythology, perhaps this is because some of the ancestors of the Japanese crossed over from the South Sea to Japan.